

能登半島における嫁の里帰り慣行

蓼 沼 康 子

1. 問題と方法
2. 能登半島の婚姻と里帰り
3. 事例
4. 里帰りの実態と意味
5. 結語

1. 問題と方法

これまでの日本社会における家族研究は、家族を集団としてとらえ、さらには日本社会に特徴的な「家」制度との関連の中で進められてきた。家はそこでともに日常生活を営む近親者を中心とする集団をあらわす。そして、家は同居・同財・同竈・同祭祀を基本的な特質としてもっている。さらに家は超世代的な永続性を原理とし、人々は家を途絶えさせないことを常に考えてきた。日本社会も多様であり、すべての地域が強い「家」原理によって貫かれていたとはいえないが、世代を越えるという点への志向は認められる。家の継続は、子どものうち一人を家の跡取りと定め直系家族を形成していくことにより、より明確な形で進められる。そのためには、婚姻という形で他家から婚入者を迎える必要がある。日本社会にあっては、男子が家の跡取りとなることが一般的であったために⁽¹⁾、女性が婚姻によりその生家から婚家へと移動を行ってきた。

婚姻により女性はその帰属を生家から婚家へと変更させる。そして、女性は嫁という立場におかれ婚家での新しいメンバーとして迎えられるが、その移行期には不安定さを伴い嫁は婚家においてひとりよそ者のような気分を味わう。婚家では主婦は家長の妻である姑であり、主婦権は姑の手にあった。嫁たる女性に期待されることは一家の労働力であり、また家の永続維持のために次の世代の担い手を産むことである。このような婚姻を行う場合、生活の変化は嫁である女性の方に見られ、それも婚礼時の婚家への引き移りの際に急激にやってくる。その上嫁の側に一方的に婚家への同化が要求されるため、嫁と婚家の人々とくに同じ女性として同じ役割を期待される姑との間に葛藤を生んだ。

一方で、嫁である女性が婚姻により生家から婚家へと帰属を変えることは、生家と婚家という二つの家を結び付けることにもなる。この二つの家は「近いシンセキ」としての交際を行い、様々な点で関係を持っていく。したがって嫁は婚姻後も生家との関係を保ち続けることになる。この関係を浮き彫りにするものの一つとして、婚出後に女性がその生家を訪問する里帰りがあげられる。

里帰りは婚姻儀礼の一つとして行われるものや、正月や盆に儀礼的に行われるものの他に、比較的生家での滞在期間が長いものがとくに日本海沿岸地域を中心に見られた。センダクガエリなどと言われるこれらの慣行は、婚出後もかなりの期間嫁が生家で過ごし、その際の嫁の生活は生家が負担することになる。センダクに帰っている間に嫁たちは自分と子どもの衣類の調達を行っていた。さらにこれらの地域は嫁の生家の負担の重い地域としても知られている。ここでは能登半島における里帰りを取り上げ、その実態を明らかにするとともに、嫁である女性と生家との関係という視点から分析を試みたい。

2. 能登半島の婚姻と里帰り

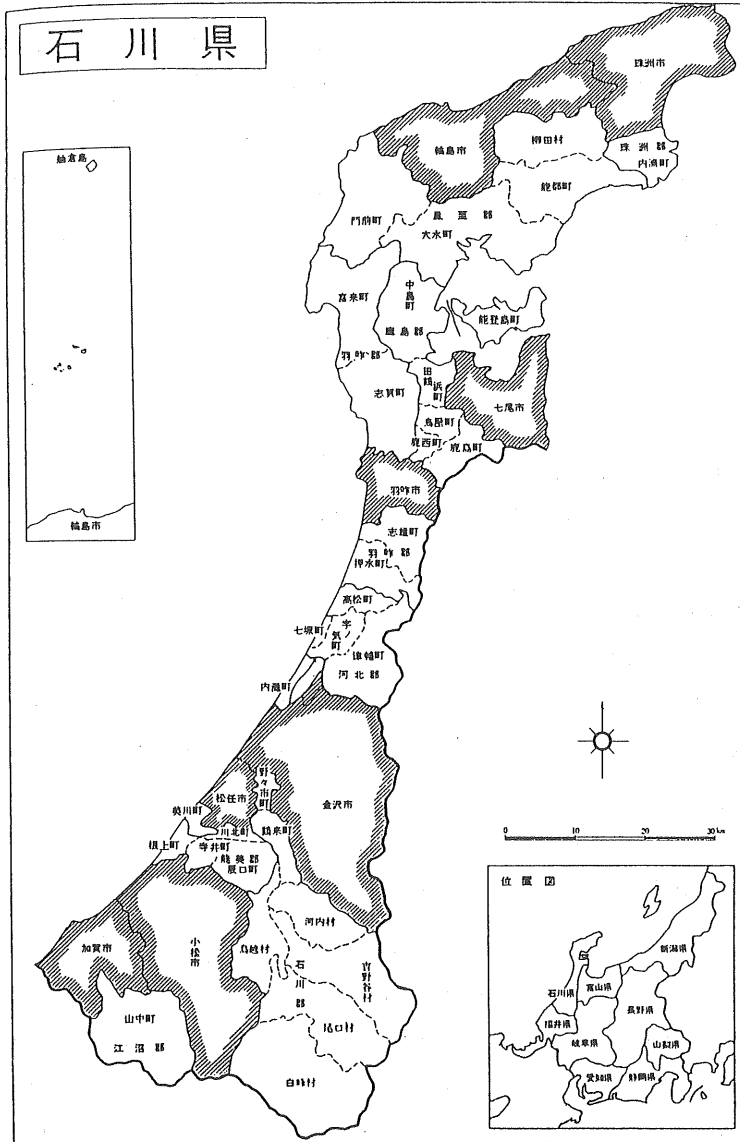
能登では嫁の婚家への引き移りをヨメドリといい、婚家で盃事が行われる。その盃は嫁と婚家の親との間で行われるもので、その席には夫である婿は出席していなかった。

また能登は、ヨボシオヤ・ヨボシゴと呼ばれる擬制的親子関係が、成人に達した時に結ばれ、かつては15歳ごろに多く行われていた。疎遠になってきた親族との関係を深めるためや後見人になってもらうために親子関係を結んだと言われている⁽²⁾。女子の場合は婚姻後にカネツケをしてもらう人に親を依頼した。

こうして大人として認められると、男子は「若い衆」と呼ばれる若者組に加入し、村社会から一人前として扱われた。そしてヨメドリの話が持ち上がるようになる。かつては通婚圏は狭く、村内婚率も高かった。家格が考慮され、上層の家の場合には遠方婚も行われていた。初婚年齢は男子が20歳前後、女子の場合は15、6歳であった。嫁入りの話は親を中心に進められ、依頼された仲人が嫁方を訪ね、親から承諾を得ると婚姻の成立となった。その際には当事者の意見は求められず、婚礼の当日に初めて婿の顔を見ることも多かった。

ヨメドリの日には、仲人が嫁を迎えに来て、嫁はその仲人と親代わり・ツレ女房とよばれる濃い親戚の女性とともに生家を出た。嫁入り道具もそのときに運ばれ、箆笥・長持ちを荷担ぎとよばれる人が運んだ。嫁となる女性は婚家の座敷に通され、そこで婿方の両親と親子の盃を交わす。そこには婿は出席さえしておらず、嫁となった女性はあくまでも婚家の嫁として迎えられたことが象徴されている。祝宴が行われ、嫁が招待客に披露される。さらに次の日には、嫁と姑とで近隣の女性たちに挨拶に回る。

また、この地域にはウチアゲとよばれる初婿入りの慣習も存在した。初婿入りとは婚姻後に初めて、婿が嫁の生家を訪問することをいうが、婚礼の後ある程度の期間をおいて行われた。それまでは婿は嫁に生家を訪ねないといわれており、ウチアゲの時には嫁の生家は婿を歓待する⁽³⁾。



また、婚礼後の三日帰りなどの儀礼的な里帰りの他にも、この地域の嫁たちはさまざまな機会に生家に帰っている。長期にわたる里帰りはセンダクガエリなどと呼ばれ、嫁は婚出後も生家に帰って自分や子どもの着物の調達・調整を行った。センダクガエリは年間数回行われ、それは春や秋の農閑期や冬季に行われた。「姑はアネサマ（嫁）に着物一枚くれなかった」と言われ、嫁の衣類は生家で調達させるものとされていた。嫁たちはセンダクガエリの度に数日から20日間程度

生家に帰り、そこで休養と衣類の調整を行ったという。センダクガエリは婚姻後かなりの期間続けられ、嫁の婚家での地位の安定とともに終了する。したがって姑のいない嫁はセンダクガエリは行わない。地域によってはチョウハイと呼ばれる里帰りが存在し、それはいわゆるセンダクガエリと同じ意味であったり、婚家から土産をもらってする里帰りのことをさすこともある⁽⁴⁾。また、能登島ではヒヲトル嫁と呼ばれ、婚姻後嫁が定期的に里帰りをし、生家の労働を手伝うことも行われていた⁽⁵⁾。嫁は婚家の労働力としては大きく期待されていたが、婚家での成員権を獲得し安定させ、ついには主婦権の譲渡を受けるまでは非常に多くの時間を有した。その間嫁である女性たちは経済的にも情緒的にも生家に依存し続けたのである。生家をフリヤと呼ぶ地域では「娘はフリヤの難題」とも言われた。またそれ以外にもツケトドケと言われ嫁の生家から頻繁に婚家へと届け物がされ、この地域は嫁の生家の負担の重い地域として知られている。

3. 事例

ここでは1995年8月に調査を行った石川県鳳至郡柳田村の事例を中心に、能登半島でみられるセンダクガエリなどと称される長期里帰り慣行と婚姻の事例を取り上げる。

(1) 石川県柳田村小間生

小間生においてはその通婚圏は、明治初期には小間生内が37.8%、柳田村内24.3%、昭和37年には小間生内33.3%、柳田村内30.2%、昭和53年には小間生内27.5%、柳田村内31.9%といずれも柳田村内のみで60%を占め⁽⁶⁾、さらに隣接する県内の地域を含めるとほとんどの婚姻がその範囲内で行われてきたことになる。地域内婚率は必ずしも高いとは言えないが、小間生以外のところからの婚入者であってもセンダクと呼ばれる里帰り慣行を行っていた。

小間生では娘が20歳前頃になると、嫁入りの話が持ち上がった。婿側の親たちがナカドとよばれる仲人をたて、娘の家へ何度か足を運び承諾が得られるとサカテオサメになる。その際には当事者の意見をきかれることはなく、親の判断で決定した。そしていわゆる見合いは行われず、婚礼の日まで会うことはなかったという。サカテオサメの時に婚礼の日取りを決める。それまではできる限り秘密に事を進めた。結婚式はヨメドリといわれ、婿方から嫁迎えが来て、嫁は仲人、ツレ男・ツレ女房とともに生家を出た。嫁入り道具は荷担ぎの人に担がれて、嫁といっしょに婚家に届けられた。ヨメドリには婿は出席せず、嫁と婿の両親とで盃をかわした。

嫁入り後も、嫁たちは田植えのときに着る着物やたすき、手甲などは生家で作ってくるものとされ、そのために生家へ帰った。センダクとはお針をすることをいい、「センダクに帰る」とは生家に帰って、着物を作ったりなおしたりすることをいった。婚姻後数年間、子どもが学校に入学するころまで、この里帰りは続いた。センダクに帰るのは正月に10日から20日間、節句には4、

5日、田植えがすんだ休みのときに20日間程帰り、盆を婚家で過ごした後に生家に戻り1、2週間泊まってくる。さらに稲刈りが終わったあとも10日ほど帰るといふ。センダクに帰る回数や日数はそれぞれの家により多少異なるが、年間かなりの日数を嫁たちは生家で過ごした。センダクには近隣の村からの婚入者も生家に帰ったが、数時間から半日歩いて帰ったという。生家では嫁と子どもの着る物を作り、それを持ってセンダクから婚家に戻ったという。嫁たちは嫁入りからの時間の経過とともに、婚家でも責任をもつ仕事が増え忙しくなってくるので、徐々に生家に帰らなくなる。その頃には毎年生家で作ってもらった着物も増え、また嫁家でも少しずつ発言権を得るようになってくる。嫁たちは婚家で仕事ばかりするのであるから、気も使うし、生家に帰れることを楽しみにしていた。自分や子どものもので足りないものがあると、生家に帰った時に用意してもらったという。このような「センダクに帰る」ことは婚家に姑がいない場合には行わない。結婚したばかりの嫁たちは、「オヤモトの方がうれしかった」といい、「あと幾日すれば、うちへ帰れる」とセンダクに帰る日を楽しみにしていたという。

(2) 石川県柳田村鈴ヶ嶺

鈴ヶ嶺は前述の小間生と隣合う区域である。鈴ヶ嶺の住宅は急激な斜面に建てられているが、それは平らな所をできるだけ田にして米を作ったためだという。現在では逆に住宅を下の平坦な土地に移すことも行われている。鈴ヶ嶺でも通婚圏は鈴ヶ嶺あるいは柳田村内が多く、半数以上を占めている。さらに輪島市など往来の可能な地域を含めると、かつては大半の婚姻がその範囲内で行われていた。鈴ヶ嶺でも配偶者の選択は、当事者ではなく、双方の両親によって進められた。見合いをすることもなく、鈴ヶ嶺やごく近くの区域の場合には相手のことを見知っていることもあったが、なかにはまったく顔をみるのも婚礼の日が初めてということも多かった。

嫁入りの話は仲人が嫁の家を何度か訪ねて、嫁の親から承諾を得ると、サカテといわれて婿の家から酒を持って行き、婚礼の日取りなどを決めて婚約の成立となる。ヨメドリの日には仲人と近い親族と婿の兄弟が嫁を迎えに行く。嫁は生家の仏に挨拶をして、生家をでる。嫁入り道具を担ぐ親戚の人とともに婿の家へ向かった。途中道にしめ縄をはって嫁入りの邪魔をすることがあった。それは嫁の村・婿の村双方でしめ縄がはられたという。そこでは酒や祝儀袋を振る舞って、道を通してもらったが、それを避けるために嫁は深夜に生家を後にした。婿方の家に到着すると、嫁は玄関で婿の家から差し出された盃の水を飲み、それを地面に投げて盃を割った。婚礼の席には婿は出席せず、婿の両親と盃を交わす。

鈴ヶ嶺でも針仕事をするをセンダクといい、嫁たちはセンダクに帰るといって生家に帰りそこで新しく着物を作ったり、古い着物を修繕した。嫁たちは12月から1月に正月に着る着物を作り、3月には春の田植えに着る着物やたすきを作り、1、2週間帰り、その他にも正月や節句、秋の稲刈りの後も1週間ほど生家に帰った。センダクガエリは婚姻後数年間、10年くらいま

で続けられた。子どもがある程度大きくなって学校に上がるようになる頃には、婚家での仕事にも欲がでてきて、段々と生家へは帰らなくなるという。センダクに帰る日はそれぞれの家で決められ、婚出した娘たちがみな同じ頃に生家に帰るように調整したとも言われている。子どもの出産もみな生家で行われ、そのときには40日から60日間も生家に帰っていた。

この「センダクに帰る」以外にも、鈴ヶ嶺の嫁たちはしばしば生家に帰っていた。センダクに帰るときには生家から出来上がった着物や土産物をもってきたが、それ以外のときにも生家との行き来を頻繁に行っていた。こうして婚姻後数年間は婚出した娘たちが、かなりの時間を生家で過ごしていたことになる。

(3) 石川県河北郡七塚町

七塚町では嫁や婿を迎える時には、ウララギといって双方の両親や兄弟などが相手方の近所を訪ねてその評判を聞くことが行われた。それがすむと迎える方からタモト酒が届けられ、内約になる。その後結納はホン酒と言われ、この時に婚礼の日取りが決められ公にされる。嫁入りは日が暮れてから婚家に到着するように生家を出るが、そのときには生家に親戚や知人などを招いてデブルマイが行われる。婚家に到着した嫁は、玄関で生家から持参した水と婚家の水を合わせて飲み、その杯を仲人が投げて割った。婚姻後初めて嫁の生家が婿を招待することを「婿ヨビ」といい、婚礼に劣らず豪華なものであった。婿はそれまでは嫁の生家を訪ねることはなかった。

七塚町ではチョウハイと呼ばれる里帰りが行われていた。婚家での縫い物や洗濯物を生家に持ち帰り、生家の母親がその手伝いをする。チョウハイに帰っているときに、嫁たちは「寝だめ・食いだめ」をしたという。里帰りをするときには婚家から饅頭などの土産を持って帰ったが、「姑の一鉢、嫁の十鉢」と言われたように生家から婚家へ戻るときにはその倍もの土産をもって帰った。その上、生家からは中元や歳暮のツケトドケは欠かさず届けられた。

(4) 石川県鹿島郡島屋町

島屋町でも一人前になったときに、ヨボシオヤ・ヨボシゴの擬制的親子関係を結ぶ。ヨボシオヤは成人として世にでるにあたって、援助・応援をしてくれるものである。女子の場合には結婚後にオハグロをしてくれる親をとり、オハグログロといった。

婚姻の成立に際しては寺がかかわり、嫁は花嫁姿のまま寺に「師匠とり」といわれる挨拶をした。通婚の範囲としては村内婚が多く行われており、婚礼の席には婿は出席せず、嫁が婿の両親や親戚と盃をかわした。嫁入り道具にはのれんをもっていくものとされており、それは「風に吹かれるままに、抵抗しない」という嫁の心得であるといわれた。

嫁の生家はフルヤと呼ばれ、フルヤが嫁の休養と金銭上の不足を補うものとされた。嫁の晴れ着や仕事着、田植えの笠まで、そして生まれてきた子どものものも嫁のフルヤで準備する。また、

島屋町ではチョウハイとよばれる里帰りが行われており、チョウハイは正月休み・三月チョウハイ・サツキ休み・盆のチョウハイ・秋休みの年に5回、嫁たちは生家に帰った。その度ごとに生家に2週間から1か月も滞在した。婚家の労働力として期待されている嫁は生家に帰って休養し、自分と子どもたちの衣類の洗濯や繕い物をした。また生家から小遣いをもらって、嫁のシンガイとよばれる姑には内緒の蓄えにした。チョウハイを終えて婚家に戻るときには、生家から餅や魚などの土産を持って帰った。さらに生家から婚家へはツケトドケといわれる贈物が、正月に始まって儀礼や村の行事の度に、嫁の父親が持参して届けられた。

チョウハイは子どもが2、3人になり、嫁の生家で跡取りの嫁が発言権を得るようになると自然と生家に帰る頻度が少なくなり、生家から持ち出す物も少なくなった。村に工場ができてからは、嫁のシンガイ稼ぎをそこで行った。

(5) 石川県珠洲市

嫁探しの話を始めることをクチツケといい、迎える方でナカドをたてて、嫁方との交渉を始める。配偶者の決定権は親にあり、当事者の意見は聞かれなかった。ナカドは数回嫁方の家を訪ね、承諾が得られるとヨメオサメといって酒が届けられる。結納をサカテといい、ナカドが婿方から酒二升を届けて、婚礼の日取りを決定する。

婚礼は春と秋の農閑期に行われ、ナカドが嫁を迎えに行き、嫁入り道具を担いでくれる人とムカエ女房とともに嫁は生家を後にする。ナワバリといって嫁入り行列の前に縄をはって酒や祝儀をもらうことが行われていたので、嫁は夜こっそり出立した。婿方の家に入るまえに嫁は玄関で盃を割った。婚礼には婿は出席せず、嫁は婿の親と盃を交わした。婚礼から三日目には嫁の生家からヘヤミマイと称して、餅が届けられ婿方の親類や近所に配った。また、婚礼後三日目にはゲンゾマイリといって、嫁と姑とで寺へ酒や饅頭を持って行き、寺からは嫁に数珠が与えられた。そして一週間後に嫁は、婿家から餅を土産にもらって里帰りをする。婿が初めて嫁の生家を訪問することをムコイリといい、嫁と婿とで出かけた。ムコイリは正月や祭りなどの節日に行ったが、嫁の生家では準備を整えて婿を待った。

年に2回、田打ち上がりと秋上がりに嫁がセンダクといって生家に帰った。そのときには自分と子どもの着物を縫った。それぞれ20日間ほど生家で過ごし、自分のシンガイをそのときに稼いだできたという。

(6) 石川県珠洲郡内浦町

内浦町にもヨボシゴ・ヨボシオヤの擬制的親子関係が存在した。15歳になると男子はヨボシオヤをとり、後見人になってもらった。女子の場合にはカネツケオヤをとった。

嫁はなるべく近くからもらうものだ、といわれ宗派も同じ方がよいといわれた。縄ないをして

いる娘たちのところに、若者が遊びにゆく夜遊びも行われていたが、そこから婚姻に発展することは稀なことであった。婿方がナカドをたてて、嫁方に交渉に行き、親からの承諾が得られるとテダルといわれる結納になった。嫁入りの日にはナカドとムカエニョウボとで嫁を迎えに行き、嫁の家でデシュウギの膳が振る舞われ出立となった。嫁入り行列を縄をはって邪魔をすることがあり、それを避けるために嫁は夜遅く生家を出た。婿方の家に着くと、玄関で盃を割り、足を洗って家に入った。そのときに嫁の生家から持参した水を婚家の水と合わせて飲むこともあった。婚礼には婿は出席せず、最後に嫁と婿の両親とで盃を交わした。嫁の生家を婿が訪問することをムコイリといった。

田植え上がりや盆、稲刈り後、冬季などのノヤスミに嫁は生家に里帰りをした。それらをセンダクともいった。この地域では男は杜氏として冬季は他所へ働きに出ているので、その間は嫁は生家に帰っていた。つまり秋の稲刈りが終わってから春まで、夫が外に働きに行っている間嫁は生家に帰っていたことになる。嫁は一年の半分を生家で過ごすともいわれ、「娘三人もったら、カマドがかやる」と言った。

(7) 石川県羽咋郡富来町

この地域は通婚圏の狭さから男女交際の機会が生れることがあり、その伝承が残されているのでとくに中層以下の男女交際が存在したのではないかと考えられる。しかし、原則的にはやはり強い家長権が存在し、婚姻の多くは親たちによって決定されていた。

ヨメドリはナカドをたてて迎える嫁方との交渉から始まる。嫁方から承諾が得られると、なるべく早く結納とされ、シメザケといわれる酒二升が届けられた。婚礼の日には嫁は深夜に婚家に到着し、アワセミズといって玄関で盃を割って婚家に入った。婿不在で本膳となり、夜明けまで饗宴は続いた。

初婿入りはウチアゲ・ムコヨビ・ヨビハジメなどと呼ばれ、遅くとも子どもが生まれる前に行うといわれるが、婿方はあまり容易には招待を受入れなかったという。ウチアゲのときには嫁の生家では「スリコギでニワハク」といわれるほど周到に準備をして婿を迎え、ヨメドリのときに匹敵するほどの饗宴を行った。ウチアゲをして婿が嫁方を訪ねることによって、婚姻成立の儀礼が終了すると考えられ、またそこで嫁の婚家での地位が安定した。

嫁は婚家では不安定な立場に置かれ、とくに嫁入り後日の浅い嫁はキガケヨメ・イマヨメなどとよばれ婚家では言い付けられたアテシゴトだけをするのがヨメツトメであった。その嫁が婚姻後しばらく時間が経過すると、ハンガカ・ハンゴテ・ナカジャーサなどという『半分主婦』になる。それはもはや中年に達した嫁であり、オカカという主婦になる前段階で、ハンガカになると姑から様々な点で相談を受けるようになる。主婦権を有するオカカは穀物計量の枡や蔵の鍵を管理し、「シャモジをもっている」と言われる。この主婦権の譲渡は夫の家長権の譲渡と同じ時期

であったり、あるいは死に譲りが行われることもあった。

また嫁の生家からのツケトドケもほとんど毎月のように行われた。とくに嫁入り後日の浅い嫁には里方がきちんとツケトドケを行ったという。ツケトドケに来た嫁の親が許しを乞うて、センダクドマリという里帰りになる。親と一緒に生家へ帰ったり、数日後に嫁が帰った。センダクドマリは田植え上がりに1週間程度、秋上がりに20日間程度、墓参りと称して盆に3日、フユグチとって冬季には1か月ほど嫁は生家に帰っていた。1年に最低4回、合計すると60日以上にもおよぶ期間嫁は生家で生活した。嫁家で仕事の区切りがついた後に嫁たちは、ヨメプロシキやセンダクプロシキに縫い物をする着物を包んで持ち帰り、生家で縫い物や繕い物をした。それは婚家での仕事から解放され休養をとることであり、同時に婚家先の口減らしでもあった。ツケトドケやセンダクドマリを行う生家の負担は大きく、「オバ3人でシンダイがつぶれる」とも言われていた。

4. 里帰りの実態と意味

以上のように能登半島では、嫁が婚出後も年に数回生家を訪問し、その滞在期間がかなり長期にわたる「センダク」と呼ばれる針仕事を生家でするための里帰りが行われていた。嫁たちは農閑期に里帰りし、生家で自分や子どもたちの衣類の調達・調整を行っていた。その際に婚家からとくに土産や儀礼的な挨拶もなく、むしろ生家から「センダクに帰らせてもらいます」と親が挨拶する所もあった。そして、生家から婚家へ戻るときには、生家で作った着物とさらに土産を持って行った。そこには「嫁のものは生家が作るもの」という考え方があり、里帰りするときには婿の反物を渡され生家でセンダクすることはあっても、嫁の物が届けられることはなかった。

そして、婚姻当初の嫁にはとくに生家が充分にその援助をしてやるものとされていた。柳田村では新しくきた嫁はその年の田植えの時には、赤いたすきを掛けて、新しいかすりの着物を着たので、それは綺麗であったという。そのときの着物を作るために、正月の休みには生家に帰る必要があった。嫁入り後数年間はそうした新しい着物で嫁たちは田植えをしたという。しかし、嫁たちも婚姻後の時間の経過とともに、徐々にではあるが婚家でその立場を安定させていく。婚家での仕事に責任を与えられるようになり、嫁の意識も変化を見せ婚家のために少しでも多く働きたいと思うようになるという。その頃には生家訪問の回数も日数も減少し、いずれ里帰りをしなくなる。

こうして婚出後も生家に長く滞在する嫁たちではあるが、婚姻成立祝い婚家で行われ、婚舎も婚家である。嫁の引き移りも婚礼の際に行われ、同時に嫁入り道具も婚家に運びこまれ、いわゆる嫁入り婚の形態をとる。さらに、婚礼の日に生家を出る際に生家の仏壇にまいるなど、生家との訣別を象徴することも行われる。また、婚家に入家の時には入り口で杯を割る、あるいはそ

の時に生家から持ってきた水と婚家の水とを合わせてその杯を割るなど嫁の帰属の変更が象徴された儀礼が行われる。つまり嫁は婚礼をもってその帰属が変更したことになるのである。

しかし、婚姻により成立した婚家と生家との二つの家の関係を見たときに、この地域は嫁の生家の負担の非常に重い地域としても知られている。ツケトドケといわれる嫁の生家からの贈答が頻繁に行われ、ほとんどが一方的とさえ見えるような関係が続く。嫁の出産に際しても40日から60日と非常に長い期間里帰りし、また誕生した子どもの物はみな生家で用意して婚家に返す。

そしてかつての嫁たちが「嫁の物は婚家では作ってもらえない」と言うときに、嫁家ではそこから出た娘たちのものを作ってやらなければならなかったからだ、とも言われている。嫁と婚家との関係として見ると、確かに嫁の物は生家の負担とされているが、一つの家として考えた場合、嫁の物は作らずに婚出させた娘たちの物を作っていることになる。そこには社会全体としてのある種の循環を見ることができよう。したがって婚家ばかりが経済的に楽をしていることにはならない。

一方では嫁は婚家の新しい成員として迎えられ、その一方では嫁はいつまでも経済的にも情緒的にも深く生家とつながっている。婚礼の在り方を見ても、嫁は明らかに婚姻によって婚家へと所属を換えている。村の公的な面でも嫁は婚家の成員である。しかし、柳田村の嫁たちが「うち」というときには生家をさしており、里帰りを「うちへ帰る」と言うのである。確かに着る物から日用品にいたるまで必要な物は生家に帰って調達するのであるから、彼女たちにとって生家の持つ意味は非常に重いものであった。

5. 結 語

日本社会にあって婚出した娘がその生家を訪問する「里帰り」は、広く分布するものであり、またいくつかの種類が見られる。婚姻成立の祝いを終了させた後に、初めて嫁が生家を訪問する「三日帰り」「五日帰り」といわれる里帰りがある。これは婚姻儀礼のひとつとも解釈され、嫁方での婚姻の披露でもある。さらに、儀礼的に節日には嫁は時には婚家から土産物をもって、生家を訪問する里帰りがある。これら儀礼的なものとは別に嫁が生家を訪ねることも多い⁽⁷⁾。とくに嫁家への引き移りをもってその帰属を変化させたばかりの、婚姻後の日の浅い嫁にとっては生家の方が婚家より居心地がよいと感じることもやむをえないといえよう。女性がその帰属を変更することにより婚姻が成立しているのであるが、その後嫁が生家を訪ね、しかもかなり長期にわたって生家で生活することを許容する社会が存在する。こうした嫁の里帰り慣行は、嫁となった女性の労働力の分配・嫁の休養・嫁への生家の援助という視点からとらえることができる。

伝統的な日本社会においては、女性は婚姻とともにその帰属を婚家へと変更させ、それは生家での成員権を捨てることと考えられていた。家存続のために親と息子との関係が強調され、娘と

くに婚出後の娘と生家の親との親子関係はこれまで取り上げられてこなかった。里帰り慣行を行っている社会にあっても、婚姻の際に嫁と婿の両親との親子盃のみが行われることに象徴されるように、嫁となった女性は家の中で強調されてきた親子関係に組み込まれることにはなる。しかし、その後も生家と、とくに生家の親との間に強い関係を保ち続けており、しかもそれを社会が承認している。このように関係を維持し続ける親と娘との親子関係から、日本の家族を見ることも日本家族の理解のために必要な視点であろう。

(注)

- (1) 相続者としての男子がない場合には婿養子という制度が実施された。伝統的な日本社会にあっては比較的頻繁にみられた制度である。婿養子として婚入してきた男子の場合には、ここで取り上げる里帰り慣行は儀礼的なものを除いては見られない。
- (2) この擬制的親子関係においてはコになる方からヨボシオヤを依頼した。
- (3) 初婚入りは婚礼からかなりの期間を経てから行われるものとされ、それによって婚入してきて嫁の地位が安定したと言われてきたが、昭和40年代に変化を見せた。初婚入りの時期が次第に早められ、嫁迎えを兼ねて行われるようになった。
- (4) 正月チョウハイ・サツキチョウハイ・盆チョウハイなどと呼ばれ、その度に数日間嫁が里帰りをする慣行は富山県にも分布している。
- (5) 嫁が婚家と生家との間を定期的に往復する。
- (6) 『柳田村史』
- (7) 大間知篤三 1936

<参考文献>

- 七塚町史編纂専門委員会編 (1976) 『七塚町史』 石川県七塚町
 金沢大学教育学部若林喜三郎編 (1950) 『島屋町史』 石川県鹿島郡島屋町
 珠洲市史編さん専門委員会編 (1979) 『珠洲市史』 石川県珠洲市
 内浦町史編纂専門委員会編 (1982) 『内浦町史』 石川県珠洲郡内浦町
 志賀町市編纂委員会 (1979) 『志賀町史』 石川県羽咋郡志賀町
 富来町市編委員会他編 (1977) 『富来町史』 石川県羽咋郡富来町
 天野武 (1994) 『結婚の民俗』 岩田書院
 平山敏治郎 (1950) 「ヒヲトル嫁」『加能民俗』 4号
 (1955) 「民間習俗」九学会連合能登調査委員会編『能登 自然・文化・社会』
 中込睦子 (1987) 「若狭地方における嫁の「里帰り」と家族の構造」『史潮』新21
 大間知篤三 (1936) 「親里にいる妻」
 (1950) 「フリヤの難題」『加能民俗』 2号
 (1950) 「足入れ婚と其の周辺」『民俗学研究』 1号

(1967)『婚姻の民俗学』 岩崎美術社

瀬川清子 (1953)「嫁の里がえり」『日本民俗学』 1巻1号

蓼沼康子 (1994)「日本海沿岸地域における婚出女性の娘としての意味」『城西大学女子短期大学部紀要』
第11巻1号

坪井洋文 (1964)「南佐渡小木町琴浦の社会と習俗」九学会連合佐渡調査委員会編『佐渡自然・文化・
社会』

(1983)「日本海沿岸諸村における婚姻儀礼の類型性」『家族史研究』 7

上野和男編 (1979)『奥能登柳田農村社会の構造』 明治大学社会学関係ゼミナール報告

八木透 (1994)「シュウトノツトメと家族慣行」『民俗のこころをさぐる』